

# 浙江省思想宗教史跡調査団に参加して

阿 純章

## はじめに

平成八年（1996年）8月25日、楠山春樹先生、三崎良周先生を中心とする「浙江省思想宗教史跡調査団」と名付けられた一行は、午前十時ちょうどに上海に向けて成田空港を飛び立った。そもそもこの旅行は楠窓会、如是会の合同主催によるもので、土田健次郎先生、大久保良峻先生、成瀬隆純先生が発起人及び幹事役となって実現したのである。そのお陰で、私のようなものまでが楠山、三崎両先生とご一緒に中国を旅できるという、まるで夢のような機会に恵まれたのである。今回私は初めて中国を訪れたので喜びもひとしおであった。

## 8月25日〈成田空港→上海（見学）→寧波〉

東京からわずか三時間あまりで上海に到着し、空港を出たとたんに猛暑の歓迎を受けた。夏の中国の暑さは覚悟していたが、睡眠不足でぼんやりしていた頭もすっかり覚めてしまった。ただ、とても暑いと感じたのはこの日だけで、幸い残りの六日間は大変過ごしやすい気候であった。一行はそそくさとクーラーの効いたバスの中に逃げ込み、市内にある上海博物館へと向かった。道中、車内では「中国でクーラー付きのバスに乗れるとは！」とか「高速道路ができてたなんて知らなかった」などという驚きの声があちこちで聞こえてくるので、初めて中国を訪れた私さえも、ここ何年かの間に急速に変貌を遂げる様子を感じ取ることができた。確かに窓の外を見回せば、どこもかしこも建設中のビルばかりが立ち並んでおり、次回またここを訪れることがあれば、今と全く違った風景になっていて、その時はきっと私も驚きの声をあげているだろうなと思った。

上海博物館はもともと豫園の北西にあったが、去年の末に人民公園に隣接する場所に新館が建設されたそうである。私たちが訪れた時には、古代青銅館、古代陶器館、古代雕塑館の三つの部門が開放されていたが、今年の十月からはその他のスペースも全面オープンするようである。古代青銅館では、主に夏、商代より春秋時代の各地の青銅器を系統別に陳列しており、時代的な様式の移り変わりがよく分かるようになっている。その迫力たるや、まさに圧倒的であり、一つ一つの青銅器に生き生きとした古代人の魂が今もなお宿っているかのように思えた。ここでほとんど

の時間を費やしてしまったせいで、その他は、残念ながら古代彫刻館を急ぎ足で見学するだけで終わってしまったが、ここもまた充実した彫刻物が立ち並んでおり、そのなかでも特に興味をもったのは、六世紀中頃の南朝の石造如来三尊像である。南朝の仏像はあまり例がないのでたいへん貴重なものなのではないだろうか。

博物館の見学が終わると、一行は空路によって寧波へと向かった。

## 8月26日（寧波（見学））

寧波は浙江省の東北に位置する。古来、貿易港として栄えた街であり、日本や朝鮮から中国に入る際にはまず寧波に上陸するのが通例で、最澄、圓珍、栄西、道元などの僧侶もまたこの地を経由したのである。

この日は寧波郊外を専用バスで観光したが、天童寺、阿育王寺をめぐるAコースと、余姚王学関係の遺跡をめぐるBコースの、どちらかを選択できるようになっていたので、私はAコースを選んだ。（Bコースについては、永富青地氏の報告に委ねる。）阿育王寺は市街から東へ十六キロの距離に位置するが、それよりさらに東方十キロほどのところにある天童寺を先に参拝した。

天童寺は西晋の永康元年（300）に義興という僧侶が草堂を建てたことにはじまり、開元二十年（732）に至って法瑠が再興し、至徳二年（757）に宗弼の徒によってそこから約二キロほど離れた現在の場所に移されたそうである。現存する伽藍は清代のものである。この寺には道元、栄西らが留学しており、日本の禪宗に大きな影響を与えている。また画僧、雪舟もここに訪れており、日本と大交縁のある寺院である。

天童寺に至るまでは、一筋の白い参道が続いている。本当ならばここから歩くべきなのだが、特別の配慮でバスに乗ったまま寺に向かうことになった。その道の両側には、赤松が連なり、それがいつしか鬱蒼と茂る濃緑の竹藪へと移り変わった。印象的な風景だった。この参道の途中には伏虎亭、古山門、景情亭と名付けられた三つの門があり、現地ガイドの説明によれば、これらの門は空、無相、無作の三つの解脱門にあたり、この寺に入門するために参道を歩む僧侶に対して戒めを与える意味があるそうだ。つまり山門は三門であり、禪宗系寺院によく見られる形態である。

二つの万工池を過ぎると、「東南仏国」と刻まれた大きな照壁が現れ、その奥に天王殿がみえた。ここでバスを降り、天王殿に入った。その中央には俗的な笑みを

浮かべた金色の弥勒（布袋の姿をしている）像が座し、背面には弥勒像と対照的に引き締まった表情の護法神韋駄天像が、まるでこの殿の背後の仏殿を守るかのように立っている。この二像の両側にはそれらを取り囲むように極彩色の派手な四天王が並んでいる。このような弥勒殿は、現代の中国寺院に広く見られる形態である。そして基本的にはその背後に主殿（大雄宝殿）が建ち、伽藍の中心軸上を占めるのが普通である。布袋は弥勒の化身とされるが、現地ガイドによれば、ここに布袋が奉られているのは、参拝者が未来において弥勒に会合するために、今のうちに布袋に約束しておくためであると説明していた。

日本の仏教寺院の静かな宗教的雰囲気とは全く異なる空間にどぎまぎしながら、次の仏殿（大雄宝殿）へと進んだ。内部には全く形態の同じ金色の三世仏が安置されている。見ただけでは何の仏か分からないが、『支那文化史跡』（常盤大定・関野貞著、法蔵館、昭和十四年、139頁）によれば中央に釈迦、左右に薬師、弥陀であるようだ。また中央の仏の左右には阿彌、迦葉の両尊者の姿がみえる。その背面には魚藍観音像がナマズの上に立っている。観音がナマズを押さえつけることで地震を防ぐという意味があるらしい。観音の両脇には金色の五百羅漢が壁一面に並んでおり、たいへん豪華である。一体一体のポーズがユニークで見ていて飽きない。これは香港の信者からの寄進によってつくられたという。現在の中国仏教寺院の建物や仏像の修復費用は主に信者の寄進によって支えられており、特に在外華僑の信者によるところが大きいようである。三尊像の両側には、これまた黄金に輝く十八羅漢像が左右九体に分かれて座している。

仏殿を出て右側の雲水堂の奥には二祖国師七百回大遠忌の記念事業として創建された道元禪師得法靈跡碑が立てられている。薄暗い回廊をわたって、法殿に至る。ここはちょうど仏殿の真後ろにあたる。先の回廊と反対側に位置する石畳の美しい回廊に入り込むと、まるで迷路のようで、方向感覚がつかめなくなったが、気が付くとふたたび仏殿の前に出ていた。

阿育王寺は仏舍利を収めた阿育王の宝塔伝説の寺として有名である。西晋の太康三年（282）、狩猟を業としていた劉薩可という人物が、靈験によって自分の罪を悔いて出家して慧達と名乗り、この地に阿育王の宝塔を求め得たことがこの寺の起源となっている。現在では、慧達が見つけたと伝えられる宝塔が阿育王寺の舍利殿に奉安されている。ただし、梁高僧伝の慧達の伝記によると、阿育王にまつわる伝説がいくつか載せられてはいるが、この地で宝塔を見つけたことは述べられず、

また年代についても異説があるようである。

このような伝説をもっているだけに、きっと神秘的な雰囲気のある寺であろうと期待していたが、実際行ってみると、それとは裏腹に非常に整備され尽くした典型的な観光寺であった。舍利宝塔を安置する舍利殿はあまり印象に残らず、むしろその前に位置する天王殿、大雄宝殿のほうが目立っているように思えた。かといってこの二殿も、天童寺でみた天王殿、仏殿とほとんど変わる所のない平板なもののように感じた。

午前中にこの日予定した観光を終えてしまい、その後は自由時間になったので、花野氏、前田氏、吉村氏とともに寧波市街を散策することにした。市街の中央にある城隍廟を目指すことになった。道中、裕福そうな中国人が公園でペットの犬と戯れるのを見れば、犬を常食する国でペットになるとは幸運な犬だな、などと談笑しながら歩いた。一度路地に入ると、窓ガラスもカーテンもない崩れかけた家が立ち並び、蛙売りの中年男性が地べたに座り込んでこちらのほうをじっと様子をうかがっていた。城隍廟に到着すると、その回りには出店が立ち並び、多くの人でにぎわっていた。そして廟の門をくぐると、驚いたことに境内どころか建物の中までも商店がびっしり入っていて、城隍神のほうがむしろ場違いかのように中央にぼつんと座っていた。

## 8月27日〈寧波→天台山（見学）〉

この日は朝一番に天台山に向かう予定だが、その前に少し早起きをして、ホテルの近くにある七塔寺という寺院に行った。朝の六時過ぎというのに参拝する人の跡が絶えず、大変なにぎわいである。年寄りだけではなく、出勤前の若者の姿も見えた。お堂の中ではちょうど朝の勤行が行われていた。中国人の日常生活の中に仏教が密着している様子に感服するばかりであった。日本ではまず見るのでできない光景である。

寧波よりさらに南へ、専用バスで五時間ばかりして、天台山に到着した。折しも天台大師の千四百年遠忌の年に天台山の地を踏むことができたのは幸運であった。宿泊場所となる天台賓館は汚い共同トイレとお湯のでないお風呂しかないなどと脅かされていたが、現在は国清寺のすぐ近くに日本のホテル並の新館が建てられており、そこで快適に過ごすことができた。昼食後、一行はまず近くの国清寺をお参りした。

国清寺は天台县城の北三キロ、天台山の南麓に位置する。隋の開皇十八年（598）、後の煬帝である晋王広が天台大師の遺志を受けて創建した。当初は天台寺と呼ばれたが、大業元年（605）に煬帝より国清寺の寺額を賜った。国清寺という名称は『天台智者大師別伝』にみられる老僧の予言に基づいている。現在の建物の多くは清代のものである。文化大革命の間、多大な被害を被ったが、1973年以降、国家の援助によって伽藍は全面的に修復された。寺の正面には「教観総持」「隋代古刹」と書かれた照壁がそれぞれ向かい合わせになっており、その間に挟まれた川を豊干橋が結んでいる。入り口は隋代古刹と書かれた照壁の東側の裏手であり、ちょっと変わった造りである。一説には風水に基づいて、寺内の気を放出させないためであるらしいが、確かなことは分からない。門を入ると伽藍の中心軸上に、弥勒と韋駄天が背中合わせになって置かれる弥勒堂、四天王を安置する雨花殿、釈迦如来を本尊とし、両側に十八羅漢が列座する大雄宝殿が配置されている。基本的には寧波の寺院でみた形態と変わらないが、ここでは四天王が別棟に安置され、その代わりに弥勒の両側には密迹金剛、威迹金剛が置かれ、大雄宝殿の本尊の前には白い玉仏が座していた。また大雄宝殿の正面には天台大師千四百年遠忌の垂れ幕が大きく掲げられているのが印象に残った。別のお堂ではちょうど盂蘭盆の法要が行われており、堂内いっぱい僧侶や一般の信者が集まっていた。翌日二十八日は旧暦の七月十五日、盂蘭盆にあたり、この日の前後は盛大に行事が行われるらしい。一行は国清寺を一めぐりして、最後に弥勒殿の南西側にある放生池を眺めて、国清寺を後にした。

次に小型のバスに乗って、国清寺よりさらに北上し、仏隴の真覚寺へ向かった。真覚寺は別名、智者塔院といい、天台大師の遺骨が葬られている。隋の開皇十七年（597）、大師の人滅後、直ちに遺言通りの場所に塔院が建てられた。現在の建物は清代に修復されたものである。標高七五〇メートルの静かで景色のよい場所である。

弥勒を安置する天王殿側の正面の門は現在閉鎖されているので、東側の入口より入ると、辺りには廃材が転がっており、いまだ整備されていないままであった。内庭に入ると、こじんまりとした造りの寺院の様子が分かる。そこには文革後いままなお居住権を持つ人々であろうか、麻雀をしながら談笑したり、母親が子供をあやしたりしていた。内庭の片隅には洗濯物が無造作に干されていた。寂れた寺というよりむしろのどかであり、しばし時を忘れさせてくれた。

主殿の中央には肉身塔が安置され、天台大師の遺骨をお守りしている。国清寺や日本の天台宗が盛んに行う大遠忌の法要をよそに、静かにたたずんでいるかのようであった。肉身塔は高さ約七メートル、重慶二層の六角形の白石塔であり、全面に人念な彫刻が施されている。塔正面に奉安する天台大師金色小像にはお花とお線香が供えられていた。土田先生は『支那文化史跡』の図版（第6輯13、14）と照らし合わせて、肉身塔に施された彫刻が違っていることを発見した。恐らく現在の肉身塔は常盤氏の時代のもものと異なるか、修復されたと思われる。

真覚寺を出て少し歩くと、山裾の景色が広がり、谷底に高明寺の屋根がわずかに見えた。この寺もお参りする予定であったが、残念ながら時間の都合で行くことができなかった。

なお、天台山に関する最新の資料としては、陳公余・野本覚成著「聖地天台山」（佼成出版、1996年、五月）があり、『支那文化史跡』とともに今回の旅行で非常に役立った。

## 8月28日〈天台山→寧波→普陀山〉

早朝、というか真夜中の午前四時四十分にホテルの前に集合した。国清寺の朝の勤行を見学するためである。希望者だけであったが、ほとんど全員が集まった。夜道を懐中電灯で照らしながら大雄宝殿へと向かった。僧侶の読経は既に半ばに達していた。盂蘭盆の日であるせいかもしれぬが、殿内は僧侶と在家信徒であふれんばかりに満たされ、たいへんな熱気である。国清寺の勤行は毎日三時半ごろ開始し、在家信徒たちは供物を供えるために三時には集まって来るらしい。僧侶たちが読誦しているのは、中国仏教寺院の通例どおり朝時課誦だろう。若い僧侶が私達に、今読んでいるのは楞嚴呪、大悲呪、十小呪、般若心経であることを教えてくれた。これらは全て朝時課誦に含まれるものである。勤行が終わると、一人の僧侶が、この勤行で仏や先祖に供養した在家信徒の為に、ピンク色の疏文（願文）を炉に入れて焼いた。

このように毎日の勤行に信者たちが参加している光景は、仏教が現代に生き生きと存続していることを表しているだろう。すがすがしい朝を迎え、一行は天台山を去り、普陀山へ向かった。この日はほとんど移動に費やされた。

## 8月29日〈普陀山（見学）〉

普陀山は杭州湾に浮かぶ舟山群島の中の小島で、五台山、峨眉山、九華山とも

に中国仏教四大名山の一つに数えられる。寧波から船で約二時間の行程である。普陀山の名称は梵語のpotalaka、つまり『華嚴経』に補陀洛迦山などとある、観世音菩薩の住む山に由来する。この島の東沖合の洛迦山という小島と合わせて普陀洛迦山となる。普陀島と仏教との結び付きは、日本の留学僧、慧萼と関係がある。慧萼が五台山から銅製の観音像一体を日本に持ち帰ろうとした途中、普陀山に船がさしかかると、突如動かなくなり、彼は観音がここに留まりたいのだと考え、島民に提供された庵にこの像を安置して祀り、それが「不肯去観音院」と号されたという。慧萼がこの島に到着した年代は唐会昌元年（841）、大中年間（847～860）、梁貞明二年（916）など、様々な異説がある。慧萼以降この島は観音霊場として栄え、最盛期には三百あまりの寺、三千人の僧侶がいたという。但し、繁栄の陰には悲惨な歴史もあり、明、清代には海禁の令、倭寇の襲撃、オランダの進攻、今世紀では文革などで、しばしば仏教文物が破壊にあっている。現在では多くの仏教寺院が立ち並び、現地ガイドの話では、僧侶五百人、尼僧八十人がいるらしい。昭和五十九年の普陀山視察報告では、いくつかの寺院が修復中であったそうだが〈注〉、今回の旅行で見た際には、その全てはきれいに整備されており、そのほかに新しく造られた建物や建築中のお堂も見た。

夏場のこの島は、中国人のリゾート地としても人気があり、海水浴を楽しむ客でにぎわっている。散歩をすると、上海や寧波のけたたましい車のクラクションや自転車の大群とは全く無縁の一種独特なのんびりとした空間に包まれており、心地がよい。

さて、普陀山でのスケジュールは、先ず午前中に島の南方にある潮音洞、不肯去観音院、紫竹林、普濟禪寺をめぐり、午後は北方の慧濟禪寺、法雨禪寺、楊枝庵を見学した。潮音洞とは波打ち際にある洞窟のことで、周辺には花崗岩の岩場が広がっている。ここは観音像を携えた慧萼の船が留まった場所にあたる。付近には不肯去観音院という小さな祠と紫竹林という寺がある。この不肯去観音院は慧萼建立のものではなく、現在の普濟禪寺が慧萼の不肯去観音院を継承しているらしい。しかし、どちらの寺にも慧萼將來の観音像は見当たらなかった。

普濟禪寺は、この島で最も古く、規模の大きい寺である。普陀山仏教協会の事務所もこの中にある。現在の伽藍は、勅によって康熙二十八年（1689）と雍正九年（1731）の二度にわたって再建築されたものである。普濟禪寺という寺号は康熙三十八（1699）に賜っている。山門を入ると先ず通例のごとく弥勒を奉る

天王殿があり、そこを抜けると主殿である大円通殿が建つ。その本尊は観音霊場らしく観音像が座していた。その両側には普通ならば十八羅漢が置かれるが、ここでは三十二の観音応化身像が並んでいた。これは『楞嚴経』の三十二応や『法華経』普門品の三十三身に由来があるのだろう。

慧济禅寺は仏頂山上にあり、島の最高所にある。一行の歩みがおのずと止まるほど見晴らしのきれいな場所であった。明代の創建である。伽藍は天王殿、大雄宝殿が中心だが、地形の関係で左右に並んでいる。大雄宝殿はこの島の他の寺院と違って、釈迦を本尊にしている。また、近くには雌雄同体の鵝耳櫛という樹木があり、これは世界唯一の珍種だそうで、私達一行の目を楽ませた。

法雨禅寺は普陀山の中央、奥深い山林の中にひっそりと立っていた。創建は明代になってからである。尊勝陀羅尼、大悲心陀羅尼が刻まれた二つの石塔の間を過ると、この静かな空間に割って入るかのように艶やかで豪華な主殿が見えてくる。これは九龍観音殿と称され、天井に九龍の彫刻が施されている。この主殿は金陵にあった明代の故宮、九龍殿を清の康熙帝より賜って移築したものであるそうだ。

法雨禅寺を出て西に向かうと、楊枝庵が見えてくる。ここには楊枝観音の描かれた碑が保存されている。たいへん美しいお姿である。これは唐代の名画家、閻立本の画を明代になってから碑にしたものである。観音像は彼の作品の中では珍しく、また基になった画も現存しないため、この碑は二重の意味で貴重なものだという。浙江省重点文物保護単位にも指定されている。

以上、普陀山の主要な寺を見て回ったが、常盤氏が『支那文化史跡』（150頁）の中で漏らしていたように、まさに島中仏寺で満たされている観がある。しかし、この島には仏教だけではなく、安期生、梅福、葛洪らが隠棲したという言い伝えもある。島の南西、海に面した所には梅福にちなんだ梅福庵がある。自由時間に吉村氏とともに興味本位で見に行くことにした。現在は尼僧寺になっていたが、寺の奥に煉丹洞があり、そこで待ち構えていた一人の尼僧が我々を洞の中に引き入れ、万病に効くという井戸水を飲め飲めといい、断り切れず、腹を下すのを覚悟で飲むことになった。観音の霊験のお陰か二人とも何ともなかった。

〔注〕榎泰純『普陀山の仏教-資料紹介を兼ねて-』大正大学研究紀要第七十一輯、文学部仏教学部、昭和六十一年）



## 8月30日（普陀山→寧波→上海（見学））

この日は午前四時に起床し、普濟禪寺の朝の勤行を見学した。国清寺と同様に、在家信徒がはやくから来て、供物を供えていた。終わると本尊の正面後方に並んだ。十人前後である。やがて鐘と太鼓が鳴り響き、僧侶たちが入堂してきた。ただ、日本の僧侶のように整然と間隔を寸分もずらさずに入ってくるのではなく、三々五々ばらばらである。なかには遅刻者もいた。のんびりとしていて、それなりに好感がもてる光景である。僧侶は本尊の前に左右に分かれて立っていた。尼僧の姿もかなり多く見られる。読経が始まると国清寺で行われていたような朝時課誦と異なることに気づいた。通常はこの寺でも朝時課誦を行うようだが、今日は特別なのだろうか。勤行が終わり、一人の僧侶に尋ねると、「釈迦牟尼仏聖誕祝儀」を行っていたと教えてくれた。しかし四月八日でもないのになぜこの儀がなされたのかよく分からない。普陀山で入手した『仏教念誦集』（四川省仏教協会発行、仏歴2537年春刊）を参考にその次第を簡単に記してみる。

（1）香讚　－本文省略－

（2）念誦

南無楞嚴会上仏菩薩（三称）

楞嚴呪　－本文省略－

般若波羅蜜多心経　－本文省略－

摩訶般若波羅蜜多（三称）

（3）讚偈　－本文省略－

繞念

南無本師釈迦牟尼仏（向上一問訊出位繞仏約數百千声然後各歸原位）

（4）拝願（左右兩序分別唱拝起聽引磬聲大眾須一律整齊）

－仏、菩薩名省略－

（5）三婦依

次に儀礼の所作について、大雑把に見た限りのことを紹介しておく。吉村氏のメモも参照した。

①僧侶入堂

②三度礼拝する。（在家信徒も共に）

③左右の僧侶たちが向かい合わせになって読経を始める。それと共に木魚と鐘が

速いテンポでたたかれる。

- ④導師が侍者を従えて入堂し、本尊の正面に至る。侍者は礼盤を設置する。
- ⑤左側後方の一僧が線香を信徒に渡し、信徒はそれを持って、順に導師の前にある大型の香炉に供える。
- ⑥導師退堂（礼盤はそのまま）
- ⑦僧侶の説誦が続く。
- ⑧導師入堂
- ⑨⑤の動作が繰り返される。
- ⑩導師を先頭に退堂し、殿の正面の内庭を説経しながら繞行する。（在家信徒も共に）
- ⑪入堂して、もとの位置に戻り、左右の僧侶が本尊に向かって、仏、菩薩の名を称えながら交互に礼拝する。
- ⑫導師退堂し、香炉の蓋が閉められ、礼盤が片付けられる。
- ⑬僧侶の説経が続く中、再び信徒に線香が配られる。
- ⑭説経が終わると、一僧侶が信徒の名を一人一人呼び、ピンク色の疏文を手渡し、信徒は香炉の蓋に空いている丸い穴から線香とともに疏文を入れる。（先に蓋を閉めたのは灰になった疏文が外に散らばらないようにするためだろう。）
- ⑮三度礼拝し終わり、退堂する。

一行はその日のうちに寧波を経由して上海に戻った。夕食後、外灘まで足をのびし、上海の夜景を満喫した。中国の夜も今日で見納めである。

## 8月31日〈上海（見学）→成田空港〉

上海を後にする前に玉仏寺を参拝した。けばけばしい寺院であるという悪評を聞いていたが、それほどひどいとは思わなかった。これまで多くの中国寺院を見てその雰囲気慣らされてしまったせいだろうか。むしろ私は熱心に祈りを捧げる人々の姿に、仏教が中国に生きていることを感じ取り、感慨深かった。日本人の仏教イメージとはだいぶ違うが、そこには確かに中国人の仏教イメージを投影した宗教空間が形成されているのである。また、どこに行ってもほとんど変わり映えない同一のスタイルをもつ現代の中国寺院は、観光客にとってははささか退屈であるかも知れぬが、その統一感は、むしろ一丸となってこの現代に仏教を復興し、盛り上げて

いこうとする意志の表れとして捉えられないだろうか。そしてそれを支えているのは、この玉仏寺でみるような一般信徒たちなのであろう。

一行は上海を後にして、午後六時、全員無事に日本に帰国した。

## おわりに

以上、たいへん冗漫な記録で申し訳ないが、浙江省思想宗教史跡調査団の報告とする。最後に今回の旅行の計画、幹事に尽力して下さった上田健次郎先生、大久保良峻先生、成瀬隆純先生、そして会計を担当して下さった青木隆先生に感謝いたします。また、楠山春樹先生、三崎良周先生をはじめとして参加者皆様との親睦は、この旅行のすばらしい思い出として心に刻まれた。

### 浙江省思想宗教史跡調査団参加者（敬称略） 計 23 名

楠山春樹	楠山富美	三崎良周	三崎泰子	青木隆	伊吹敦
大久保良峻	垣内景子	加藤実	窪田哲正	嶋崎一郎	須崎正彦
田中智幸	土田健次郎	永富青地	成瀬隆純	成瀬景子	花野充道
前田繁樹	間島由美子	森由利亚	吉村誠	阿純章	